

久しぶりの本稿の更新になりましたが、1か月ほど前の6月7日から2日間(一部では3日間)、中国全土で統一大学入試「全国普通高等学校招生入学考試(高考(ガオカオ))」が行われました。

隋の時代の昔から、学問、勉強を重視する伝統のあるこの国で、「高考」は人生を左右する一発勝負の場です。今回は、「高考」の内容とともに、最近の受験生やその親の考えなどについて考察してみたいと思います。

平成30年7月10日

【第17回】現代の科挙？全国統一大学入試『^{ガオカオ}高考』と留学熱について

【今日のポイント】

- ◆「高考」は、(省や市によって内容は違うが)大学入学のための一発勝負の「一大イベント」。
- ◆(出身地によって微妙に不公平があるが、競争が熾烈なのは間違いない。
- ◆親の経済力などによっては、オプションとして海外留学という選択肢もある。北九州市もその選択肢に十分なりうる。

1 ^{ガオカオ}「高考」とはどんな制度か？

正式名称は「全国普通高等学校招生入学考試(高考)」。ここでの点数によって、進学する大学が決まります。

中国の大学入試＝「高考」は、試験問題や配点は省や市によって異なり、日本の二次試験に相当する大学ごとの試験は原則行われず、AO入試、推薦入試などもなく、一発勝負であるのが特徴です。

そのため、受験生にとって、「高考」はその後の人生を左右しかねない大変重要なものです。

教科は、必修の「国語・数学・外国語(主に英語)」と選択科目で、志望大学(最大)5つ、本科(4年制)5つ、専科(2-3年制)5つを申請して、第一志望の入学ラインに届けば合格。届かなければ、第二志望、第三志望に振り分けられるというシステムのようなのです。

ここ数年の受験生はだいたい毎年940万人くらいでしたが、2000年という切りのいい年生まれで、プチベビーブームとなった今年は975万人(ちなみに日本の受験生が約50万人)でした。

中国には大学が約2700校あり、そのうち4年制が約1100校。大学進学率は約35%。高校4年生というような形で、日本でいう浪人生はいますがごく少数です。

また、同じ大学でも、地域ごとに合格者数の割当てがあり、有名大学が集中する都市部の戸籍の受験生のほうが結果的に優遇される制度になっています。ここでも、本稿の第1回で取り上げた「都市戸籍」と「農村戸籍」の取り扱いの違いが厳然と存在します。

2 「00年後」世代と言われる最近の高校生世代

今年受験の世代となった2000年以降生まれの子は、「00年後」と呼ばれ、2001年に北京オリンピックの開催が決まり、その後もあり得ないスピードで一気に豊かになった時代に育ちました。彼らは文化大革命も天安門事件も歴史上の話で、豊かで強い中国しか知らない世代で、親のほうも子ども教育へはお金を惜しまないというのは本稿で何度か取り上げた通りです。

社会的な成功のために、子どもにたくさん勉強させて、できるだけ評判の良い大学に行かせたいと思う親がいる一方で、その同質の競争に加わらず(または競争に勝つことをあきらめて)海外留学に活路を見出す親も増えてきているようです。

(特に大都市で特に顕著だと思いますが)現に上海市内には中国人も通えるインターナショナルスクールや海外への進学を念頭に置いて、外国語で授業を行う私立学校が非常に多いのが印象的で、入学するには「相応の成績+高額な授業料が払える親の経済力(+多分コネも)」が必要なようです。

英語圏のブランド大学への入学を望む者が多い一方、中国から近く、安全で快適な日本も有力な進学先のひとつとして人気化しつつあります。九州では、留学先として立命館アジア太平洋大学がよく知られています。留学先の選択には、学校の先生や先輩の推薦、親戚や知り合いが通っていたからなどが大きな影響があるようです。

北九州市には、昔から中国語教育に注力している北九州市立大学のほか、ひびきの地区の大学にも多くの中国人留学生が卒業し現在も在籍していますが、これから日本人の受験生が確実に減る中で、彼らを介した情報発信などに真剣に取り組めば、北九州市内でもっと多くの中国人に教育の場を提供できると思います。



中国人の受験生の数は日本の約20倍。
競争も熾烈です。